

常総型石枕の型式学的研究

石井友菜

はじめに

本稿が対象とする常総型石枕は、滑石を主な素材とし枕形に造形した器物で、現在の千葉県・茨城県の県境にかつて存在した内海である「香取海」周辺に多く分布する。主に径20～30m前後の円墳から出土することが多く、これら中小規模古墳の被葬者に多く用いられた葬送具であったと考えられる。特に本地域の石枕は、同じく滑石で製作された立花と呼ばれる付属品と結びつくことで、独自の儀礼体系を構築していた。こうした諸特徴から、他地域に散見される石製の枕と区別して常総型石枕と通称される。本稿では常総型石枕の基礎研究として、加工痕の整理と形態分類に基づく編年案の構築を行い、常総地域内における石枕の展開を整理した。

第1章 研究史と課題の設定

本章では常総型石枕に関する研究史を整理した。常総型石枕の研究は主に①地域的特色としての研究、②型式・編年研究、③加工技術の研究に大別される。分布および形態の特徴から、列島内でも独自の強い葬送儀礼の存在が想定され、当該地域の地域史復元の重要な材料として注目をうけ、基礎研究としての型式・編年論が重点的に研究されてきた。しかし、かねてより指摘されてきた形態のみでの分類の困難性という課題については解決をみないまま、現在に至っている。

現在の研究は①・②から③へと関心が移り行く過程にあるが、製作技術を強く意識した近年の成果の多くは、製作技術の検討から型式論、あるいはその先にある地域史の復元研究へ回帰することを目的とした論考である。これらの研究が示すように、製作技術の分析をもとにした、常総型石枕の型式学的再検討および編年案の提示が、常総地域史をより詳細に解明するための第一歩であると考えられる。

しかし、製作技術・加工痕の分析は、型式学的研究ほどに潤沢とは言えない。これは、多くの先行研究が1遺跡のみの単発的な検討に留まるもので、統一的な視点から横断的に複数遺跡の資料を検討した例が少ないことに起因する。そして、横断的な研究が行われてこなかった理由に資料の散逸性、および加工痕の提示の難しさ、それに起因する加工痕の統一的な認識の困難性という、研究手段の上での課題があったと考える。現段階で求められているのは、石枕の網羅的な集成、加工痕の観察、およびそれらを高精度の計測モデルや画像を利用して客観的に提示するという基礎研究である。

以上の研究史の整理をもとに、本稿の課題として以下の3点を設定した。

- (1) 常総型石枕の集成・計測
- (2) 加工痕の分類と製作工程の復元
- (3) 型式学的研究

(1) にあたっては、常総型石枕70数例の内、47例を実見し、内45例には前述した加工痕の分析にお

る問題の解決のため、早稲田大学が所有するハンディタイプ3D スキャナー：EXAScan による高精度三次元計測を実施した。この成果をもとに、第2章では加工痕の分類と加工部位の分析、第3章では製作工程の復元を行った。これらの分析をふまえ、第4章では型式学的研究を行った。以下、各章ごとにその内容を概括する。

第2章 加工痕の検討

本章では、石枕の表面に残された加工痕に関する分析を行った。まず、3D スキャナーによって取得した高精度の表面情報と、デジタルマイクロスコープによる微細写真をもとに、加工痕の観察を行った。

この成果をもとに、加工痕をA～Fの6類に分類した。加工痕が遺物表面に残す起伏の大きさ、1単位あたりの面積などから、Aが最も荒い成形に用いられ、表面に凹凸を殆ど残さないFに向かうにつれて丁寧な調整になると推定した。

また、石枕の部位ごとにどのような加工痕が用いられたかを検討した。この結果、石枕上面、特に頭受け部はほとんどの個体において加工痕Fによる丁寧な調整が行われている。次いで、頸受け部・平坦面、高縁側面も加工痕Fを主体に丁寧な調整が施される。これは石枕のもつ機能に起因する造形意識、つまり頭を置く部分を丁寧に作るという意識の証左と考えた。一方、基底部側面と底面は加工痕A・B・Cなど凹凸の残る多様な加工が施され、打割面をそのまま残す場合もあり、加工には個体差が大きい。石枕の造形中において、これらの部位の調整は、頭受け部ほどには丁寧な造形が志向されなかったと推測した。

第3章 製作工程の復元研究

本章では、一部に製作途中の明らかな失敗の痕跡を残す「未成品」の検討をもとに、石枕の製作工程の復元を行った。主な検討対象としたのは、成田市台方宮代1号墳・水戸市杉崎八幡神社裏古墳の2点である。

台方宮代1号墳出土例は、底面に荒い加工痕Aによって円形と台形に掘りくぼめられた加工途中の痕跡が残る。この痕跡は完成した上面の頭受け部・頸受け部の形状と酷似しており、何らかの理由で受け部を作る途中で製作を止め、石材を裏返して新たに頭受け部・頸受け部を作出していると考えた。受け部と底面の痕跡を比較すると、底面は頭受け部の位置が完成面より上端に近い位置に作出されており、結果として頸受け部が完成面よりも長くなる。このことから、本例は頭受け部の位置のズレに起因する、頸受け部の長大化を原因とした製作の放棄を示すと推測した。つまり、石枕の形状を決定するにあたり、頭受け部・頸受け部の位置・長さが重要な要素であったと考えた。

次に、杉崎八幡神社裏古墳例を検討した。本例にも底面に2つの掘りくぼみがあり、それぞれ完成面の頭受け部下端、基底部外縁に対応する。完成面と底面で異なるのは石材平坦面内での位置であり、底面の位置・形状のまま製作を続けると、一方の基底部の幅が著しく狭くなる。このことから、本例は受け部・基底部外縁の位置のズレに起因する、基底部・高縁幅の減少を嫌った故の製作の放棄を示すと推測した。また、完成面の頭受け部下端と基底部外縁の幅と底面の痕跡の幅がほぼ一致することから、裏返した後も受け部下端—基底部の間隔を変えずに製作していることが分かる。不足した側と反対の基底部幅を減じる、あるいは高縁の幅や数を減じて均等に調整するといった対処をしなかった点から、高縁の幅・数には作り替えた際にも踏襲されるような一定の志向性があったと推測した。

以上2例の検討と、前章での加工痕の検討を合わせ、本章の最後に石枕の製作工程の復元を行った。中でも、受け部や高縁の間隔をあらかじめ刻み付けておく「割付」という手順が想定された。石枕の造形にあたっては、製作者の目指す完成形がある程度決まっており、割付の工程を踏んで慎重に造形したものと考えられる。中でも重視されたのは受け部および高縁の形状であった。

第4章 型式学的研究

加工痕および製作工程の検討から、以下の点が確認された。

- (1) 石枕の造形中において、頭受け部・頸受け部が特に重視されたこと。加工痕Fによる最も丁寧な調整が施され、製作工程からみても、造形にあたっては第一に優先されるものであったこと。
- (2) 頭受け部・頸受け部の長さや形態、高縁の幅や数には一定の志向性が存在したこと。

本稿では以上の観点から、①受け部形状、および②高縁の形状を重視し、形態の細分を行った。上述の通り、石枕の形状を最も強く規定する要素は受け部である。また、受け部形状は頭受け部の造形によって資料群が以下の2つに大別される。

A：頭受け部が正円形あるいは横長の楕円形を呈し、頸受け部との境に明瞭なくびれを有する。

B：頭受け部が円形あるいは隅丸方形を呈し、頭受け部と頸受け部の境が明瞭でない。

先行研究ではB類をA類の退化形態とみなし、全て新相のものに位置付けている。しかしB類の中にも数段階の形態変遷が認められ、全てをA類以後の所産と捉えるにはなお一考を要する。既往研究をみても、最も年代観の錯綜がみられる一群であり、改めて検討する必要がある。

よって、まずは類例の多いA類について形態の分析を行った。分類基準とする要素は、前章までで得られた受け部形状、および高縁の形状である。高縁は受け部を取り巻く圍繞の度合い（巡り）、および高縁1段目平坦面の2段目・3段目平坦面に対する幅によって分類する。また付帯要素として外形、立面形状（基底部・高縁の高さ）を検討した。

この検討の結果、A類を5類型に細分した。この検討をもとにB類にも同様の分類を行った。この結果、B類を4類型に細分した。A類・B類ともに各類型間の対応性が認められ、これをもとに形態の変遷を定めた。また、この変遷観が妥当であるかを確かめるため、石製模造品・鉄鍔・埴輪・須恵器といった共伴遺物の年代観を確かめた。この結果、形態の変遷観と共伴遺物の年代観に大きな齟齬がないことを確かめた。そして、この結果と石枕の形態的な変容をもとに、5世紀から6世紀前半を4期区分した編年案を提示した。1・2期の間が緩やかな変遷を迎える一方、3・4期の間には形態の変容をもとに明確な線引きをすることができる。この1・2-3・4期間の変容は、石枕の造形意識における大きな転換であったと推測した。

おわりに

以上、加工痕と製作工程の分析をもとに、石枕の型式分類および変遷観を提示した。常総地域は、石枕の存在によって通常は不明瞭な中小規模の古墳の動態を明らかにし得るという点においても貴重な地域である。この点に常総型石枕研究の意義があり、本稿で示した変遷観をもとに常総の地域社会をより詳細に解明することが可能になる。

しかし、本稿では明らかにし得なかった問題点も多々ある。特に、常総型石枕の出現系譜については、祖形とされてきた西国諸地域の器物を合わせた検討が不可欠である。今後は、古墳時代前・中期におけ

る関連遺物の列島規模での変動の中から常総地域において石枕が発現した理由を明らかにしていく必要がある。

アンコール後期における在地陶器の研究

——バイヨン寺院出土遺物を中心にして——

奥 勇 介

はじめに

本論文はカンボジア、アンコール時代（9～15世紀）の在地陶器であるクメール陶器について、バイヨン寺院という一消費地遺跡から、型式学的研究の実践によりその生産供給体制に迫るものである。これは、クメール陶器の生産地と消費地の関係性を把握し、当時の社会的実態を解明するための基礎研究と位置づけられる。

第1章 バイヨン寺院の歴史的な位置づけと研究の意義

バイヨン寺院はカンボジア北西部に位置するアンコール遺跡群の内の一遺跡である。ジャヤヴァルマン7世の治世下で12世紀末に建造が開始された仏教寺院であり、かつ同時期の有力な信仰を総合的にまとめた区画配置をとる。バイヨン寺院は、アンコール後期の総括的・中核的存在であり、当該期の社会の実態を解明するうえで極めて重要な遺跡である。

第2章 研究史

クメール陶器の研究史を方法論的見地からみると、型式学的研究には器種の分類、技術の類型化、時空間上への位置づけという3つのプロセスが存在する。時空間上への位置づけという点については、王朝交代の流れの中に位置づける方法から、社会的コンテクストの中に位置づける方法へと転換してきている。しかし、こうした方法論は遺物の帰属関係が不明瞭な消費地遺跡では未だ確立に至っていない。

これに対して貿易陶磁には、主にクメール陶器との関係性、機能・役割の問題、年代推定の3つの観点での研究が存在し、消費地での遺構・土層の年代決定に対する有効性が認められてきている。

バイヨン寺院に関しては、増改築過程のモデル化と計画性の解明が進められ、遺物研究では主に中国陶磁による年代推定がおこなわれているが、在地製品の研究は今後を待つところが大きい。

以上から、バイヨン寺院など消費地での型式学的研究の実践に際しては、貿易陶磁との共伴関係による遺物群形成など、複合的な要因を統合した研究方法が必要であるといえる。

第3章 バイヨン寺院出土土器・陶磁器の型式学的分類

本論文では、バイヨン寺院で調査をおこなっている日本国政府アンコール遺跡救済チーム所蔵資料（中央塔、南経蔵周辺部、外回廊外郭南東隅出土資料）を対象に、筆者が実測図作成などをおこない、コンテナ129箱（資料数7268点）を扱った。これらを用い、型式学的分類、製陶技術の類型化、貿易陶磁の年代推定の手順をとり、出土遺構・層位を考慮した共伴関係を構築し考察へとつなぐ。

本章ではまず、バイヨン寺院出土資料の型式学的分類を下記の通りおこなった。

- ・クメール土器…大別5類（壺・甕類、鉢類、蓋類、燭台類、ストーブ類）。壺・甕類は壺（1～3類）、鉢類は鉢（1～2類）、蓋類は上方湾曲形蓋（1～2類）・下方湾曲形蓋に細分。
- ・クメール無釉・灰釉陶器…大別5類（合子類、碗類、瓶類、壺・甕類、瓦類）。合子類は合子蓋・合子身、碗類は碗・脚台付碗、瓶類は小型瓶・大型瓶、壺・甕類は壺・有耳壺、瓦類は丸瓦（1～2類）・平瓦・棟飾りに細分。
- ・クメール黒褐釉陶器…大別4類（壺・甕類、蓋類、動物形態器類、瓦類）。壺・甕類は壺（1～4類）・バラスト壺・有耳壺・底部穿孔壺、蓋類は小型蓋・有鈕蓋、瓦類は丸瓦・平瓦に細分。
- ・クメール二色釉陶器…大別1類（壺・甕類）。
- ・中国陶器…大別3器種（碗、盤、壺）。壺は相対的に、壺、小型壺の2種に細分。
- ・中国白磁…大別5器種（合子、碗、盤・皿、杯、壺）。合子には合子蓋・合子身の両方がある。
- ・中国青白磁…大別4器種（合子、碗、盤・皿、壺）。合子には合子蓋・合子身の両方がある。
- ・中国青磁…大別8器種（合子、碗、盤・皿、杯、瓶、壺、鉢、蓋）。合子には合子蓋・合子身、碗にはサイズの差から碗・小型碗、壺には小型壺・有耳小壺がある。
- ・中国青花磁器…大別1器種（碗）。
- ・タイ青磁…大別1器種（盤・皿）。
- ・ベトナム鉄絵磁器…大別1器種（碗・皿）。ベトナム陶磁の中で中心を占める。
- ・ベトナム白磁…大別2器種（碗、人形）。
- ・ベトナム青花磁器…大別1器種（人形）。
- ・緑釉陶器（産地不明）…大別2器種（合子（合子身）、壺）。

第4章 分析

第1節 クメール土器・陶器の製陶技術

本節ではクメール土器・陶器の製陶技術の類型化をおこない、器種と技術の関係性を分析している。

（1）素材の選択…土器の胎土は、視覚的に浅黄色系と赤橙色系に分かれるが、主体的器種でこれの明確な差異がなく、素材の選択性がそれほど働いていなかったとみられる。クメール陶器は白色系胎土と赤色系胎土に明確に分かれ、これは先行研究通りの結果である。

（2）成形・整形…土器は叩きづくり、紐づくり（整形に回転板使用、不使用、使用不明）、手捏ね成形の5パターン、クメール陶器は紐づくり（整形に回転板使用、不使用、使用不明）、ロクロ成形、手捏ね成形の5パターンに分類できる。紐づくりや手捏ね成形は土器と陶器の間で技法を共有する。

（3）施文…土器の文様帯構成は平行沈線、連続刺突文、複数手法の組合せ、幾何学文様の4パターンであり、すべて器壁に水平に施される。クメール陶器の文様帯構成原理は、「沈線・隆帯」、「沈線・隆帯に刺突文・波状文・貼付文が挟まれるもの」、「釉掻き取りによる放射状文」の3パターンに分けられ、すべて器壁に水平に施される。つまり、土器・陶器ともに先行研究でいう「環状の文様帯構成原理」を認められる。

（4）施釉…バイヨン寺院では灰釉（小型器種）と白色系胎土、無釉・黒褐釉（大型器種）と赤色系胎土が器種構成の点である程度の共通性をもつ。

以上より、クメール土器・陶器の間には素材の選択で認識の隔たり、施文手法で共通の認識があり、

クメール陶器では先行研究通り素材・器種・釉種に連動した関係性があることを理解できた。

第2節 貿易陶磁の年代的位置づけ

本節ではバイヨン寺院出土中国陶磁を、先行研究の分類を参考に生産窯と年代で下記の通り再分類した。

・ A～B期（8世紀末～12世紀前半）

基準資料の少ない不明瞭な時期（A期の資料はない）。越州窯系青磁Ⅲ類。

・ C～D期（11世紀後半～13世紀中頃）

基準資料の明瞭な時期。龍泉窯系・同安窯系青磁Ⅰ類、龍泉窯系青磁Ⅱ類、同安窯系青磁、福建省系・江西省系白磁・青白磁、徳化窯系白磁。

・ E期（13世紀初頭～14世紀初頭）

基準資料の少ない不明瞭な時期。龍泉窯系青磁Ⅳ類。

・ F～G期（13世紀前半～14世紀中頃）

基準資料の明瞭な時期。龍泉窯系青磁Ⅲ・Ⅳ類、徳化窯系白磁（、枢府系白磁（白磁碗B類））。

・ G期以降（15・16世紀）

基準資料の少ない不明瞭な時期。染付碗E群（16世紀後半）。15世紀～16世紀前半の資料に欠ける。

ここから主体的時期をC～D期とF～G期の2つ認められ、バイヨン寺院建造に伴う下層整地（12世紀中頃～後半上限）と上層整地（14世紀前半）の年代に合致するだろうことが理解できる。

第3節 共伴関係の構築

バイヨン寺院の各種遺構のうち安定的な推定年代を得られる外回廊外郭南東隅は、下層遺構（土壌12SK032、下層整地）と上層遺構（上層整地、外周壁S20、舗道S30）に大きく分けられる。遺構記録の照合作業と前節の年代推定から、前者をC～D期、後者をF～G期とすることができ、以下の2つの遺物群を構成できる。

①下層遺物群：C～D期（11世紀後半～13世紀中頃）

土壌12SK032と下層整地が標識遺構・層位であり、一部上層整地に混入している遺物を含む。総じて無釉・灰釉器種を中心とした一群である。

②上層遺物群：F～G期（13世紀前半～14世紀中頃）

上層整地と外周壁S20・舗道S30が標識遺構・層位である。黒褐釉器種が大幅に増え、二色釉陶器も若干みられる。また、ベトナム産の鉄絵・白磁があり、貿易陶磁も拡充する。総じて、無釉・黒褐釉器種を中心とした遺物群に移行している。

第5章 考察

クメール陶器の生産地には、確実なものでダンレック山地周辺、アンコール地域、ベン・メリア寺院周辺の窯跡群が知られる。本章では下層・上層遺物群の構成資料とこれら生産地との関係性を考え、クメール陶器の生産供給体制に迫る。

《下層遺物群》灰釉碗は従来の窯跡資料と同技法であるが異形態である。一方で、無釉脚台付碗は技術的・形態的にタニ窯系として捉えられる。突起が端部に付く無釉丸瓦2類は、突起の接続方法で差異が

あるものの、ベン・メリア寺院周辺の黒褐釉陶器窯跡群に属するトップ・チェイ窯跡で確認されている。すべて生産地と時期的な整合性をとり難いが、交流主体はアンコール地域とベン・メリア寺院周辺の窯跡群にありそうである。

《上層遺物群》バイヨン寺院の資料ではダンレック山地周辺とベン・メリア寺院周辺の資料を区分することは現状困難である。一定量ある黒褐釉バラスター壺の高台部でもダンレック山地周辺のものとの差異に、確証を持てるものはない。一方で黒褐釉の底部穿孔壺について、底部穿孔壺の生産はアンコール地域の灰釉陶器窯跡群で確認されており、これの需要に応じる用意があるとすればアンコール周辺域とその東に広がるベン・メリア寺院周辺の窯跡群で相違ない。

こうした結果は、ダンレック山地周辺域と消費地アンコールとの関係性が考え難いものであることを示す。また、器種によって生産窯が異なり、ある生産地から複数器種を1セットでバイヨン寺院に供給していないことがわかる。よって、「各消費地における選択需要」とそれに応えた「各生産窯における分配供給」という生産供給モデルを提唱できよう。

おわりに

本論文では、消費地での型式学的研究の実践により、バイヨン寺院出土遺物の全容を解明し、アンコール後期におけるクメール陶器の生産供給体制の試論を構築した。これが、消費地の視点からアンコール時代の社会の実態を解明するたたき台となれば幸いである。

コスタリカにおけるヒスイ製ディオス・アチャ型ペンダントの研究

久保山 和 佳

1. はじめに

本研究で対象地域とするコスタリカは中米南部に位置し、南北を古代メソアメリカ文明と古代アンデス文明に挟まれている。当該地域では、国家段階に達した社会はなく、巨大な公共建造物も確認できない。また、階層化社会は存在したが、その生活様式は未だ明らかでない。

研究対象のヒスイ製ディオス・アチャ型ペンダント（以下、ディオス・アチャ）は同地域において階層化社会とエリートが出現した、紀元後300～700年に利用の最盛期を迎えた副葬品である。上部の彫刻モチーフ（文様帯）に対し、下部には刃部（無紋帯）が残存するのが特徴である。背面には、斧状素材の擦切りによる切断面が残存する（図1）。

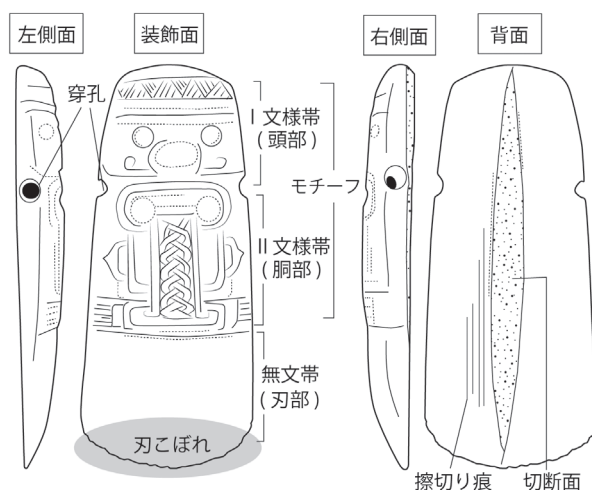


図1 デイオス・アチャの各部位名称

2. 研究目的と方法

本研究は、ディオス・アチャの彫刻モチーフに加え、製作から使用までの一連の流れを理解し、その過程における社会的要請を検討する。

本研究の遂行にあたり、執筆者はコスタリカのヒスイ博物館においてディオス・アチャ340点の実見調査を行った。また、デジタル顕微鏡を使用した微細観察の結果から、形態、製作工程、機能に着目する。

3. 形態分類

(1)サイズ、(2)側面、(3)背面、(4)彫刻モチーフに注目して分類し、形態差による製作工程・目的の違いを考察する。

- (1) サイズは多様で、最小で3.4cm、最大で38.7cmであった。サイズは、ペンダントの重さや製作コストと比例することから、日常的に装着したか否かの判断材料になる。
- (2) 側面形状は、斧状素材を利用したものと素材形状が不明なものに大別され、素材選択や製作工程を示す要素となる。
- (3) 背面形態には分割および彫刻の方法の違いが現れるため、各ペンダントの製作工程を推測することができる。特筆すべきは、模倣切断面の存在である。これは、素材の擦切り分割によって生じる特徴的な切断面が、その形成過程を知らない人物・集団によって模倣されたものであると考える。
- (4) 彫刻モチーフの全体像を人型、鳥型、ネコ科型、キメラ型、単純線刻型に大別し、各型の頭部形態を細分化した。サイズや側面形態の差異に関わらず同系モチーフが繰り返されることが判明した。

4. 製作工程

素材の擦切分割はディオス・アチャ製作における特徴の一つであり、背面の切断面および側面形状の観察から、製作工程の復元が可能となる。製作工程を検討すると、側面タイプごとに異なる工程を有していることが分かった。中でも最も多く確認されたのは、斧状素材を正面と背面に半割したものであった。また、斧状素材を半割せずに丸ごと一つ使用する個体も存在する。

製作工程の検討結果をまとめると、第一に、分割という工程がディオス・アチャ製作において象徴的意味を持つといえよう。分割行為そのものは素材不足によるものと考えるのが一般的だ。しかしながら、ディオス・アチャの場合、翡翠輝石以外の在地石材の利用や分割痕の模倣、また完成品の半割などが認められることから、不足以外の文化的要因・象徴性の存在が考えられる。

第二に、一つの素材から創出される完成品の数は技法によって異なる。これはペンダント自体の意味や価値の解釈に影響するといえよう。このことは、製作工程の差異がディオス・アチャの価値や意味に大きく関わることを示している。

5. デイオス・アチャの機能

ディオス・アチャの機能に関しては、側面に紐穴があることから、その大部分が装身具として使用されたと考えられている。ディオス・アチャの刃部はあくまでも象徴的なもので、実用性はないと考えられており (Lange 1993)、装身具以外の機能や下部の特徴的な斧形状についての考察はこれまでされてこなかった。

しかしながら、観察の結果、一部のディオス・アチャの刃部では微細剥離痕が確認できた。今後の機能研究の予察として刃部の微細観察を行なった結果、38(/362)点の個体で刃部に微細剥離痕が確認できた。これは、全体の約1割であるが、今後これらのディオス・アチャの微細剥離痕のもつ意味を考えていく必要があるだろう。

6. 社会的要請

ディオス・アチャの製作工程における特徴の一つとして、素材石材の擦切り分割がある。中でも「贈与の分割」と呼ばれる個体は、完成品を正面からさらに半割したもので、左右それぞれが別々の墓から

出土した事例が存在する。完成品をあえて半割するという行為には、何らかの儀礼的意味が付与されていたと推測する。このような分割行為は、本来一つであるものを複数人で共有することでその価値観や同族意識の可視化を目的にしたのではないだろうか。

また、中南米地域には形態的特徴においてディオス・アチャに類似する遺物が存在する。その例として、オルメカ文明の祭祀斧の小像、南東マヤ地域の石斧状祭器、ニカラグア中部の石彫、パナマの鯨歯製小像、コロンビア北西部の金製胸飾り、ペルーの黄金製儀礼用ナイフが挙げられる。以上の例は全て時空間的差異を有するものだが、どれもディオス・アチャの無文帯に相当する形態的特徴を有している。今後はこれらの資料と比較し、ディオス・アチャの祖型アイディアの由来と伝播の過程を考察していく必要があるだろう。

7. 考 察

ディオス・アチャの形態や製作工程は多様であり、その差異は社会的要請や用途の違いに依拠するものであると考えられる。このことは、これまでエリート存在を示す威信財として認識されてきたディオス・アチャだが、その使用者・製作者が一様でない可能性を示している。また、少数の個体に見られた微細剥離痕は、今後、利器としての使用を視野に考察することの必要性を示している。

ディオス・アチャの形態分類の結果を地域別に検討したところ、当該遺物の分布域各地において、形態的差異は認められなかった。一遺跡内から異なる製作技法・形態のペンダントが検出される例も存在することから、ディオス・アチャの形態的・技術的多様性は、地域差に起因しないと考えられる。また、異なるサイズ、側面形状、石材の間で同系モチーフが使用されることから、同系モチーフを共有しながらも異なる経済的・技術的背景をもつ集団の存在が推定される。

製作工程に関しては、どのタイプも斧に近い形態を指向して製作されており、下部の無文帯はその名残であると考えられる。ディオス・アチャ製作において、基本形態は「斧状」という定型がありながらも、素材選択や製作工程は比較的自由であった。製作における専門化が成されていながらも、技術的制限・統制はなかったということが考えられる。

ディオス・アチャには素材石材、製作工程などに多様性が見られることは既に述べた。しかしこれらは同じ祖型から派生し、後に異なる集団へ伝播することで、分化・多様化したと考えられる。これまでの検討から、「祖型」は希少石材・斧状素材・切断面を有するものと定義できる。それに対して、在地石材・非斧状素材・模倣切断面といった特徴を持つものは、「模倣・発展型」であると捉えられる。このような「祖型」から「模倣・発展型」への変遷は、威信財としての価値の抛り所が、石材の希少性からディオス・アチャの存在自体に移り変わったことを示す。

ディオス・アチャは石彫や儀器に比べ可搬性が高く、物質と人間との繋がりを保ったままの伝播が容易である。分割されたペンダントの片割れが、異なる人物に所有された場合、両者間の物理的距離に関係なく、片割れを身に付けることで共同体としての意識を強化・可視化できたのではないだろうか。このようにして、他者との精神的距離を近づけることを可能にしたのであろう。

8. おわりに

本研究では、既往研究における象徴性の研究に一石を投じ、形態分類、製作工程、機能分析という3つのアプローチからディオス・アチャの社会的要請を検討した。

ディオス・アチャは、形態的多様性を有している一方で、どの個体にも共通の「ディオス・アチャであること」の重要性があったと考えられる。異なる形態は製作工程の違いは、社会的要請の違いに反映されるものであり、分割・配分という行為に関して今後より深く検討する必要がある。ディオス・アチャの製作工程の多様性を示し、その伝播と使用、社会的要請に関して今後の課題をも射程に入れることができた。を見据えることができた点において、本研究の当初の目的は達せられたと言えよう。

参考・引用文献

- Creamer, Winifred. 1987 "Mesoamerica as a Concept: An Archaeological View from Central America", *Latin American Research Review*, Vol.22, No.1, pp.35-62.
- Chenault, Mark L. 1986 "Technical Analysis of Precolumbian Costa Rican Jadeite and Greenstone Artifacts", Unpublished Master's thesis, Department of Anthropology, University of Colorado, Boulder.
- Guerrero, M, Juan Vicente. 1993 "The Context of Jade in Costa Rica", *Precolumbian jade: New geological and cultural interpretations*, Chapter 14, pp.191-202, University of Utah Press.
- Guerrero, M, Juan Vicente. 1999 "The Archaeological Context of Jade in Costa Rica", *Jade in Ancient Costa Rica*, Chapter1, pp.23-38, The Metropolitan Museum of Art, New York.
- Hoopes, John W. 2005 "The Emergence of Social Complexity in the Chibchan World of Southern Central America and Northern Colombia, A.D.300-600", *Journal of Archaeological Research*, Vol.13, No.1.
- Lange, Frederick. 1993 "Formal Classification of Prehistoric Costa Rican Jade: A First Approximation", *Precolumbian jade: New geological and cultural interpretations*, introduction, Chapter 21, pp.269-288, University of Utah Press.
- Stone, Doris. 1976 "Pre-Columbian Man Finds Central America: The Archaeological Bridge", Peabody Museum, Harvard University.